また会う日まで

rina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
また会う日まで

【Ｎコード】
Ｎ９４５５Ｌ

【作者名】
ｒｉｎａ

【あらすじ】
１９世紀――――――――――――――――――――――――
神聖ローマ帝国はフランス皇帝の侵攻を受け、帝国内の全諸侯が帝国からの脱退を宣言し
帝国は完全に解体されて終焉を迎えた。
神聖ローマは滅び、消えてしまったのだ…
一人の召使を思い苦しみながらに・・・・・・・・

（前書き）

この話は神聖ローマが死んだことを知ってイタリアが悲しみ
それをオーストリアが…みたいな話です。
できるだけハッピーエンドに・・・と思って頑張ったつもりです。

１９世紀――――――――　――――　――　―

神聖ローマ帝国はフランス皇帝の侵攻を受け、帝国内の全諸侯が帝国からの脱退を宣言し
帝国は完全に解体されて終焉を迎えた。
神聖ローマは滅び、消えてしまったのだ…
一人の召使を思い苦しみながらに・・・・・・・・

――数年後――

オーストリアの城に一人の少年が玄関前で立ち尽くしていた。

「やっと…帰ってきた。ここに…」

少年は頭に帽子をかぶりマントを羽織った凛とした顔つきだった。
そして一瞬腕をドアノブにかざしたがすぐに下ろし、顔をうつむかせていた・・・

「何て言えばいいんだ俺は・・・こんなこと言ったらイタリアは何て言うのだろうか…」

開いていた拳を強く握りしめ顔を上げドアノブを掴みドアを少しづつ開けた。

「イタリアー？居るか？？」

「だ…だぁれ？」

「お前…忘れたのか…？」

そこにはとても可愛らしい三角筋を頭につけ召使服を着てデッキウラシをもった少女がいた。おびえているがどうやら少年の知り合いらしい。

「…神聖…ローマ？」

「あぁ。…やっと帰ってこれた。…待たせたな。」

少年の名前は神聖ローマ。数年前にほろんだはずの国だったのだ。イタリアはそのことを知らずに本当に嬉しそうに涙を流しとびっきりの笑顔を向けた。

「おかえり！神聖ローマ！今、お菓子用意するね。ちょっと待ってて！」

イタリアは後ろを振り向き厨房に無かをうとしたが神聖ローマに腕を掴まれた。

神聖ローマの方を向くと神聖ローマは首を横に振り、顔を苦しそうに強張らせた。

「悪いが…イタリア。俺には…そんな余裕が残されていないんだ…」

「え…どういうこと…？」

「おれは…昨日死んだんだ。」

イタリアは神聖ローマからの衝撃の告白に言葉が出ず、体が震え涙がつたい落ちていた。
イタリアはなかなかあかなくて開いたり閉じたりの繰り返しをしながらも口を開き

「え…それじゃあ、君は誰なの…？」

「俺はこの通り神聖ローマさ。」

「なっなんで…？」

「死んでから…どうしても心残りで…神様に頼んでお前に会いに来た。
ごめんな…絶対帰ってくるって約束したのにな。」

掴んでいた腕を遅し、死んでからずっと伝えたくて悔んでいた言葉を一気に話した。
死んでからもずっとあきらめられなくて、あっちの世界でもずっとイタリアの事だけを考えていたことも・・・

「…うそでしょ？だって今でも神聖ローマの手は暖かいよ。そんなわけないよね？…ねぇ、神聖ローマ！」

イタリアは神聖ローマの手を握ったみた。すると人間のようにてはとても温かい。
しかし首を横に振ることしかせず、縦には振らなかった・・・そして神聖ローマの体はどんどん薄くなっていった。もう神様に与えられた時間が来てしまったのだ。

「行かないで！！僕も神聖ローマの事好きだよ。だから…行かないでぇっ！！」

イタリアはだんだんと薄くなっていく神聖ローマに叫び続けた。頬には涙があふれこぼれている。すると神聖ローマは困った表情になった。

「イタリア……泣かないでくれ、俺はお前の涙は嫌いだ。最後に一回くらい笑ってくれよな」

「！！！」

イタリアはすべてを察した。もう神聖ローマはいない。それでも無理を言って自分のために会いにきてくれた。　もう会えないからこそ最後は笑顔でお別れをしたい…と。

するとイタリアはいったん下を向いたと思うと、袖でゴシゴシと涙をふき神聖ローマに向かって　最後に見たこともないようなと笑顔を向け

「今まで一緒に遊んでくれたりご飯くれたり…沢山…沢山ありがとうね！！神聖ローマ！！！

ずっと…ずっと大好きだよ！！！」

「イタリア…いつも怖がらせたり、不味いご飯食べさせてごめんな…ありがとう…またどこかで…会おうな。」

そう言うと、イタリアに短い間キスをして神聖ローマは　消えてしまった。

「神聖ローマ――！」

イタリアは消えていく神聖ローマに抱きついたがすぐに水蒸気のようにフワッと消えてしまった。しかし手にはまだ神聖ローマの温かいぬくもりが残っていた。
それを胸に当て、涙を流して『神聖ローマ』と何回も呼び続けたのだった…

――一週間後――

イタリアはいつも通り床をデッキブラシで掃除をしていた。
神聖ローマが来た次の日に神聖ローマ帝国の元武漢達が城に神聖ローマの死を告げに来た。
神聖ローマは勇敢に指揮をとり最後まで戦ったらしい。マントの下にイタリアが渡した
一枚のパンツを持って……

イタリアは神聖ローマが最後に言った「またどこかで会おうな」という言葉を信じていたので　普通にしていられたのだ。本当は戦争に出ていた神聖ローマを待っていた時よりももっと　一度だけ、ほんの一瞬でもいい、どうしても会いたいと願っているのだ。

そしてオーストリアの部屋の廊下の掃除をしていると、部屋から小さく二人ぐらいの
話し声が聞こえてきてイタリアはドアに耳を当ててみた。すると、そこでは一番聞きたくなかったことが語られていた。

「しかしイタリアも可哀そうですね。もう絶対に帰ってこない人をずっと待ってるんですから。」

「そうですね…死んだ人はもう自分の元へは来てくれないのに…ずっと神聖ローマくんを
信じて待ってるんですから……」

（っえ？・・・・・・・・嘘・・・神聖ローマはもう帰ってこない…？？）

前から分かっていた。死んだ人はもう帰ってこないと。
ローマじいちゃんも滅んでもう帰ってきてくれないと知っているから。
けど、信じたくなかったのだ。現実を認めることはしたくなかったあのだ。
ただずっと信じて待っていたかっただけなのだ…しかし
他人に言われると、違うと思いたくてもなかなか思えない…
イタリアはもう何がなんだか分からなくなって頭が混乱していた。

バンッ

イタリアはドアを強くたたき開けた。
そこにはオーストリアとハンガリーが二人で深刻そうな顔をしている姿があった

「・・・・・・ねぇ、嘘だよね…神聖ローマが帰ってこないなんて…
もう会えないなんて嘘だよね…だって神聖ローマ最後に言ってくれたよ「どこかで会おう」って！！…嘘って言ってよ…じゃないと…
僕…僕…これから何を信じていけばいいかわからないよ…」

「・・・・・・・・・・・・・」

二人は何も言わなかった…いや、いうことができなかったのだ・・・・

「嘘だよ」と言ってしまえばイタリアに変な期待をさせてしまい後で余計に気づつけてしまう。

「嘘じゃない」と言ってしまうとイタリアはずっと悲しみと苦しみを感じていくことになってしまう。二人にはどうすることもできなかったのだ…

「どうして何も言ってくれないの??ねぇ、なんで?…なんでぇ〜……

神聖ローマぁー、会いたい、会いたいよぉ〜…一瞬でいいから出てきてよ…

もう怖がったりなんかしないよ?逃げたりなんかしないから〜…お願い…だよぉ…」

イタリアはその日一日中泣き続けた。神聖ローマとの思い出をずっと思い出しながら…

オーストリアは部屋の外からずっとイタリアのことを見守るように立っていた。

次の日、誰が呼んでもイタリアは部屋から出ようとはしなかった…

そこでオーストリアは最後の手段をとってみた

「神聖ローマのお墓に行きたくはないのですか?」

「!!!」

周りには沈黙が続いた。
神聖ローマの墓に行くということは神聖ローマの死を本当の現実にしてしまうということ。
今のイタリアにはとても悲惨なことだった。

「オーストリアさん、イタちゃんは今でも混乱していけない状態なのに、
そんな所に連れて行ったら、余計に可哀そうだわ……」

「わかっています。しかし今のイタリアを立ち上がらせるにはこの方法しかないのです。
イタリアには本当の現実を知り、前を向いて歩いっていってほしいのですよ…」

「オーストリアさん・・・・・・」

その後もイタリアを説得し、イタリアはやっとのことで部屋から出てきて　行くことを決意した。

――南東フランス――

数時間たってイタリアとオーストリア、ハンガリーは神聖ローマの眠る地へたどりついた。
そこは、いくつものお墓が建てられていた。中にはお墓の前で嘆き悲しんでいる
女性の姿も何人かうかがえる。その中に一つ、とても綺麗な石碑があった。
そこには『神聖ローマ　９６２年　－　１８０６年』と書かれてあった。
それを見ると、神聖ローマがいないことをリアルに感じてしまう。

イタリアはなぜかわからないが涙があふれて止まらなかった。
「しっ神聖ローマ？僕だよ、イタリアだよ？？そんなところに眠ってたら風邪ひいちゃうよ。
起きてきてまた一緒に遊ぼうよ。もう怖がったりおびえたりしないから一緒にいようよ。
ね、神聖ローマぁ…返事してよ…いやだよ僕…やっぱりいやだよ…」

「……」

返事は帰ってくるはずもない。

「神聖ローマ…」

すると急に後ろにいたオーストラリアのほうを向きてくてくと歩いていった。

「ねぇオーストリアさん、本当にもう神聖ローマとは会えないの？？
神聖ローマの「また会おう」は嘘だったの？？」

顔を向けイタリアはオーストリアと目を合わせた。
神聖ローマが居なくなってからはまともに顔を見なかったのでその顔を見ると
本当に神聖ローマのことが好きだったのだとよくわかる。
顔は赤く目も充血して隈もできていたのだ。
イタリアは今までこんなに真剣に質問したことがなかったのだ。
その気持ちを裏切れまいとオーストリアは一息ついた後口を開いた。

「もう彼自身は帰ってこれないでしょう…」

「！！！！」

イタリアは驚きを隠せずとっさにつかんだオーストリアの服から
手を下ろし自分のエプロンへと手お動かし、下を向いてブルブルと
震えていた。
しかし次の言葉で一気にイタリアの表情が一転した。

「しかし、あなたがあの人の分まで生きようと思えは、ずっと信じ
ていれば
体は違えど、魂は神聖ローマそのものの人物が現れるでしょう。
あなたが惚れたのは身体ですか？それとも心ですか？
『心』でしょう。だったらその本人の言った言葉を信じて待ちなさ
い。わかりましたか…？」

イタリアの表情は暗く、頭を下げていたのからだんだんと顔をあげ、
悲しそうだった表情が嬉しそうな表情になった。
それからなぜか急に顔を赤らめさせ、手をもじもじさせた。

「うっうん……僕神聖ローマは最初怖いってずっと思ってた。
けど、一緒にいるとおなかがすいてる僕いに自分のご飯を食べさせ
てくれたり、
沢山遊んでくれたり、すごく優しくしてくれたの。
そんな神聖ローマだからこそ大好きななったんだよ……だから……
そうすればいつかきっとあえるの??」

恥ずかしがりながら頬に手を当てて言った。
誰から見ても恋する少女でとても可愛らしい。

「あなたが思い続ければね。あと、あの人なら最後に「あなたの涙はみたくない」みたいなことを言いませんでしたか？」

「うっうん」

急に質問されてイタリアは一瞬きょとんとなった。

「でしたら泣くのはお止めなさい。そんなに泣いてるとあの人がいつになってもあなたに会いにはきてくれませんよ？？」

「っえ？そうなの？？だったらもおう泣かないようにする。何があっても我慢するよ」

「そうです。わかったらこの花束をあの人の墓に手向けてきなさい。きっと喜びます」

「うん！！」

イタリアに渡したのは『ヒヤシンス』『アツモリソウ』『クロカッス』の三つの花を組み合わせた花束だった。
花言葉は『変わらない愛情』『君を忘れない』『あなたを待っています』だそうだ。たぶんオーストリアは
こうなるのを想定して前もってこの三つの花を買ってきてくれたのだろう。そういうことに疎いイタリアは嬉しそうに神聖ローマのお墓へと駆けて行った。するとハンガリーがオーストリアの隣に寄り添った。

「神聖ローマくんは本当にまた会いに来てくれるでしょうか？」

「・・・どうですかね…まぁ会いに来なくてもイタリアから会いに行くこともあるかもしれませんね。
二人の会いたいという気持ちは同じくらい強いはずですから」

「・・・そうですね」

そういいながら二人は神聖ローマのところへと駆けていく姿を静かな目で見ていた。
そして、イタリアは小さな足で少し重たい花束を持ちながら神聖ローマのお墓につき、花束を添えた。

「神聖ローマ、これ、あげるね。僕いつまでも待ってるよ。これなくても僕のほうから探しに行くよ。
絶対、絶対また会おうね！！約束だよ！！！」

約束といったとき風が自分に優しく吹いてきて、それがイタリアには神聖ローマからの「あぁ」という返事のように聞こえて嬉しかった。涙を流さないと決めたので涙をこらえて笑顔でサヨウナラを告げ、オーストリアもハンガリーもお別れのあいさつをしお城へと帰って行った。行きも無言だったが帰りも無言状態。空気が重く、イタリアは空をずっと眠っていた。
きっと眠っていなかったのとまた会えるとわかった安心で疲れがいっきにでたのだろう。その寝顔は天使のようだったらしい。

「・・・っん・・・神聖ローマ・・・・ムニュムニュ」

――――――――――――――――いつか絶対に会おうね…――――――――――――――――

数百年後イタリアは神聖ローマによく似た「ドイツ」という国とめぐり合う。
イタリアはドイツの中の神聖ローマを感じて近づいたが自分のことを全くわからなかってくれなかった。
オーストリアに前々から「人は転生すると記憶を失うケースの方が多いんですよ」と言われていたので承知していたが目の前に本人と会って「誰だ！」と言われるとやっぱりへこんでしまう。

最初は全くかまってくれなくてそっけなかったけど、しぐさが時々神聖ローマと重なるものがあってなかなか諦められなかった。だからなんど返されても飛ばされてもいい。なんでも言うよ。まずはここからでもいい。いつか思い出してくれるまでずっと待ってるから…

「友達になろう！！」

ＥＮＤ

（後書き）

初心者で下手なところも沢山ありますが、
これからもいろいろ修行して頑張ろうと思っています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9455l/

また会う日まで

2010年10月14日13時44分発行